

「150」という限界の数字

企業経営漫談士 岡野実空

当初から平成末の終了を予定していたこのコラム。その末日が平成30年大晦日なら、最終は No.125でしたが、31年4月30日となり No.142に計画延長。ところが書き進めているうちに、いくつかの要素や全体のまとめを追加する必要性を感じ、最終的には No.150が書き納めとなりました。ここで気づいたのが、これまでに3度経験した「150」という限界の数字との不思議な符合。ということで今回は、その数字から見えるマネジメントの限界を取り上げることにします。

空間：組織(目標管理)の総覧人数

前世紀末から今世紀初めにかけて、多くの企業で導入のお手伝いした「目標による管理」。その過程ではさまざまな気づきがありましたが、その一つは個人別の「難易度」判定だけでなく、その組織内のばらつき防止の難しさです。

当初、トップが総覧可能なのは200人という仮定で導入を始めたところ、対象者すべてを判定できないことが判明。人数を徐々に減らしながら試行錯誤を繰り返し、最終的に「150」人以内なら、全体のバランスが取れた判定が可能という結論に行き着きました。そしてまた、その統括する人たちのばらつき防止の限界も、同数であることが判明。以上のことから、「150」人以内で制度の理解と判断の擦り合わせを徹底すれば、大きな組織内でもそれが運用可能ということが明確になったのです。

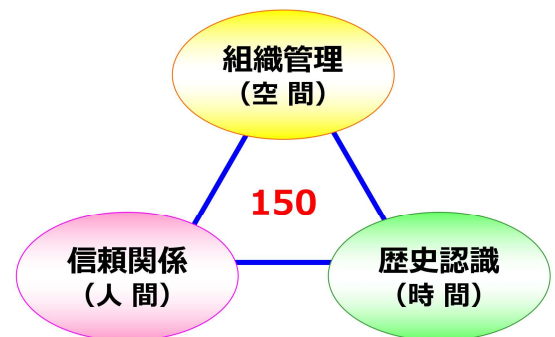
人間：ネットワークの「信頼」関係

平成の世で爆発的に拡大した SNS。しかしそれによる人間関係は非常に脆弱で、いざというとき一切頼りになりません。しっかりした人間関係は「五感」を使った共通体験などをつうじて築かれるものですが、遊びなどの機会が減り、いまそれを実感できていない世代が急拡大しています。

それを学者の立場から警告しているのは、ゴリラの研究を通じて「人間社会」への問題提起を続けている京都大学総長・山極寿一教授。その新著『ゴリラからの警告』は組織人必読の図書ですが、その中に、現代人の脳サイズに対応する集団規模が「150」人という興味深い学説が紹介されています。また現代でも、食料を生産せず、自然の恵みに頼る狩猟採集民の村の平均サイズは「150」人とか。さらに教授はそれを、私たちが年賀状を出すとき、リストに頼らず顔を思い出せる数と説明しています。

これらの事象は、真の「コミュニケーション」をつうじて、しっかりした「信頼」関係を築ける限界が「150」人であることを示唆しています。

KM E-11 「150」という限界



時間：実感性のある「時代認識」

「空間」「人間」に続く「150」3つ目の経験は、昨年の「時間」に関するもの。2018年は明治「150」年で、さまざまなイベントが各地で開かれましたが、テーマの大半は「文明開化」以降の「光」の部分に焦点を当てたものでした。またその推進者は、「明治製」伝統の礼賛者が大半でした。

それで思い出したのは約半世紀前、明治105年にあたる1973年3月、慶応義塾大学・故高橋誠一郎名誉教授の退職記念講義の内容です。第1次吉田内閣で文部大臣を務められた高名な経済学者で、かつ浮世絵の蒐集家という文化人でもあった教授にしか見えていなかったものは、それに一切描かれない(時代の)「影」だったのです。

明治17年生まれの教授は、その萌芽をいち早く察知し、以下のような伝言で講義を締め括りました。「明治は戦争が多く、町を歩くとしばしば葬式に出会った時代。人が戦争で死ぬのは決して良い時代ではありません。今後、明治を美化する人間が現れたら、必ずそのことを伝えてください」。

今年(2019年)は明治151年。人生100年時代を迎え、「150年」という期間が歴史を美化する危険性を、先達の遺言としてお伝えすることができました。合掌。

2019年5月13日 実空